

谷本会長の「アイヌ絵を聴く」

## 毎日出版文化賞を受賞

谷本一之会長が昨秋、毎日出版文化賞を受賞されました。昨年六月出版された「アイヌ絵を聴く―変容の民族音楽誌」（北海道大学図書刊行会）が、同賞の企画部門での榮譽に輝いたものです。ここにお祝いを申し上げるとともに、惜越ながら本書の概要を紹介させて頂きます。

本書は、アイヌ民族の音楽、踊り、儀式など芸能に焦点を合わせた民族誌の本で、B5判三九四頁の厚な体裁もさることながら、多数掲載されている図画、写真、楽譜、古文書などの資料が充実しています。付帯されているCDも貴重です。

副題に「変容の民族音楽誌」とある

### 内容の濃い書物

遠藤道子・副会長

このように内容の濃い書物は、他に類がありません。「アイヌ絵を聴く」という題名もすてきですし、付属されているCDも価値が高いものです。心から受賞をお喜び申し上げます（既に、谷本ご夫妻と受賞をお祝いしました）。

るのは、端的に言えば、和人の接触、あるいは幕藩体制下の同化政策がアイヌ民族の芸能の変容にどのように関わったかという点が、本書のライトモチーフであることを示しています。その一例として、男女の踊りだった「鶴の舞」が女性のみの踊りへと変わっていった経緯が考察されています。その箇所（一〇五〜一〇六頁）には本書の基調があらわれているように拝察されましたので、ご紹介しましょう。

「鶴の舞」は和人を饗応するためアイヌの代表的な踊りになっており、明治四十四年に永田方正は「……十歳なる女孫の弦歌に、百歳の二翁が鶴亀を舞ひて元旦をことほぐも明治聖代の余徳なるべし」と記しています。この永田の記述を引用しつつ、著者は「……鶴を踊るといふことが、『鶴は千年、亀は万年』という和人の伝統的意識を強く反映していることを説明している」と分



析します。そして、次のように述べます。

改俗、帰俗という名の同化政策が次第に強まるなかで、男女を区別する儒教思想、「千島の夷頼みをかけて我が皇国を仰ぐなるべし」とか「明治聖代の余徳なるべし」といった皇国史観を背景に、オムシャの礼式の女の舞として伝承されてきた鶴の舞は、蝦夷地における幕藩体制がアイヌの伝統文化を規定した一つの事例と位置づけられるべきものであり、その公式化される過程に、支配の構造やその深化の度合を読み取ることができると述べています。

このように谷本先生のお考えが明確に打ち出されているのも、多年にわたる民族音楽学者としての研究成果と、北海道アイヌ民族文化研究センター所長のお立場におられる見識とが有機的に結びついていればこそでしょう。ポーランドとの関係に着目しますと、アイヌの音楽を蠟管に録音したポーランドの人類学者プロニスワフ・

ピウスツキのことが、まず本書のはじめ（四頁）に出てきます。ピウスツキは一九〇三年（明治三六年）から〇五年にかけて樺太と北海道でアイヌの音楽を録音し、これが録音資料として最初のものと考えられているそうです。したがって「特に価値の高い資料」で、蠟管にはカムイユカラ（神謡）など北海道方言の十九作品と、ハウキ（英雄詞曲）など樺太方言の五十三作品、日本語の四作品、スラブ語の三作品が含まれていますが、この中のいくつかが付録CDに収められています。また、本書の「おわりに」の章にもピウスツキ蠟管の「トウス」についての考察があります（三四三〜三四四頁）。

もとより、緻密にして実証的な本書を、簡略にご紹介することは筆者の能力を超えており、本書の真価は手に取って頂いてこそ十全にわかるものです。毎日出版文化賞選考委員の一人である今村仁司氏は、「多方面の学問にとつて多大な刺激を与え、後に続く研究者にとつての基礎文献としての役割を果たすことであろう」と述べており、受賞の意義はこの評言に尽きているといえるでしょう。

（文責 三浦 洋）